

# 地域、建築、 人とアクティビティ

## 前編 連歌のように風景をつくる — 風景にตอบสนองする建築 —

CAtは1986年、東京大学大学院在学中の小嶋一浩、伊藤恭行ら7人によって結成された「シーラカンス」をベースとし、その後、C+Aへ改称、さらにCAt(東京)とCAn(名古屋)へと改組しながら、複数主体によるパートナーシップ型の設計集団として活動を続け、今年で40周年を迎える。

本連載では、この約10年のプロジェクトを振り返りながら、「風景」という視点を手掛かりに、私たちがどのように建築を考えてきたのかを整理してみたいと思う。

前編では、集落的思考やアクティビティという視点から、人間の活動や土地との関係性にตอบสนองする建築について考える。続く後編では、都市や制度、経済環境によって風景そのものが失われつつある現代において、どのように建築が新しい風景を変奏していけるのかについて考えたい。

この40年を振り返ると、特に小嶋が中心となって発明したさまざまな建築的キーワードは、暗中模索する設計プロセスのなかで、霧が晴れるように思考の方向を示してくれるものだった。アクティビティ、白と黒、FLUID DIRECTION、小さな矢印の群れ——。それらは時代や場所によって異なる姿をとりながらも、その根底には一貫して、東京大学原広司研



写真左 大村 真也

2004年、法政大学工学部建築学科卒業。  
2006年、法政大学大学院建設工学科修士課程修了後、CAt(C+A Tokyo)に加わる。  
2019年からCAt/パートナーとして活動。

写真右 赤松 佳珠子

1990年に日本女子大学家政学部住居学科卒業後、シーラカンス(のちC+A、CAt)に加わる。  
2002年からCAt/パートナーとして活動。  
法政大学教授、早稲田大学芸術学校非常勤講師。

究室をルーツとする「集落的思考」が流れているように思う。

小嶋一浩が亡くなってから10年が経った。近年のプロジェクトを振り返るなかで、その思考が今なお深く息づいていることを、改めて感じている。

設計をしていると、ときどき、自分たちは何か大きな決意表明をしているのではなく、連歌のように少しずつ言葉を重ねているのではないかと思うことがある。ある建築で考えていたことが、別の土地で別の形になり、さらに次の建築で変奏されていく。その連続は、自分たちだけのものではなく、共に設計してきた仲間や先人たち、地域の記憶、そこで活動する人々の時間とも重なっている。

2025年に竣工したアグリカレッジ福島を案内した、ある建築家の方に、「打瀬小学校から連綿と続く思想を感じた」と言われた。その言葉を通じて、私たちは自分たちの思考が長い時間の連なりのなかにあることを、改めて気づかされたように思う。近年のプロジェクトを振り返ると、その思考は「風景にตอบสนองする建築」と、「風景を変奏する建築」という二つの方向に現れているように思う。

因島の土生公民館では、傾斜地に民家が折り重なる集落風景のなかで、周辺スケールに寄り添うような複数の屋根を分節し、まち並みからサンプリングした素材を用いながら、建築が風

景の一部として編み込まれていくようなあり方を模索した。

ここで重要だったのは、「地域らしい意匠」を表面的に引用することではない。むしろ、地形や路地、軒下、生活の距離感といった、集落に潜在している関係性そのものをどのように建築へ取り込めるかだった。高低差のある地形のなかで屋根が重なり、内部と外部の境界が曖昧に連続し、人々が軒下に滞留する。その状態自体が、因島という場所の風景と呼応することを目指した。

近年、地方都市においても、建築は効率性や経済合理性によって均質化されやすい。しかし本来、地域ごとの風景とは、地形や気候だけではなく、人々の距離感や活動の積み重ねそのものによって形成されてきたものではなかっただろうか。

このプロジェクトは、かつて地域コミュニティの核だった小学校の統廃合によって生まれた廃校跡地に、公民館を建てる計画だった。私たちは建築を通して、その関係性をもう一度読み直そうと考えた。子どもをきっかけとして形成されていたコミュニティを、多世代へ開かれた新しい学びの場として再定義したいと考え、その思いを込めて、この施設を英語名で「HABU community learning center」と名付けた。

アグリカレッジ福島でも同様に、建築を単体として完結させるのではなく、「ニワ」「ミチ」「ツジ」といった関係性によって既存校舎を接続し、それらをキャンパス全体へ織り込むことで、学びや生活、交流が重なり合う集落的環境をつくらうとした。

農業教育の場において重要なのは、単に機能を効率よく配置することではなく、学生、教員、地域住民、生産者といった多様な主体が、偶然出会い、会話し、活動が重なり合う環境そのものなのではないか考えた。軒下やテラス、渡り廊下、土間空間は、そのための媒介として計画されている。

モダニズム以降の建築は、機能を明快に分節し、単体として完結する方向へと向かってきた。しかし私たちはむしろ、建築を未完成な関係性の集合として捉えたいと思っている。人々が行き交い、立ち止まり、時間をかけて使い方が変化していく。その余白こそが、建築を風景へ変えていくのだと思う。

一方、共愛学園前橋国際大学5号館や京都外国語大学新4号館では、「アクティビティそのものを風景として立ち上げる」ことを強く意識している。

私たちは「アクティビティ」という言葉を繰り返し用いている。それは人間の行為や流れを空間の中心に据える視点だと思ふ。建築は完成された形態として存在するのではなく、人々の活動によって絶えず更新され続ける環境として存在している。



鶴住居小学校・釜石東中学校 ©西川公明

共愛学園では、広場やホール、テラス、サクラ並木を接続しながら、人々の滞留や移動がキャンパスの風景として立ち上がる構成を目指した。学生たちの活動は内部空間だけに閉じるのではなく、街路や広場へとしみ出していく。建築が「活動を収容する箱」であることを超えて、人間の活動を可視化し増幅させるメディアのような存在になることを考えていた。

京都外国語大学でも、分断されていた二つの庭をラーニング・コモンズによって接続し、学生たちの活動が平面的に広がる空間をつくっている。大学は、単に知識を伝達する場ではない。偶発的な出会いや対話が生まれ、多様な文化や価値観が交差する環境こそが重要であり、建築がどのようにそのきっかけを生み出せるのかを考えた。

また、鶴住居小学校・釜石東中学校では、震災復興という大きな背景のなかで、鶴住居のまちの風景が失われ、土地の記憶も更新され続けていた。そのなかで私たちは、「失われた風景を再現する」のではなく、これから生まれてくる子どもたちの活動そのものを、新しい風景としてまちへ定着させたいと考えた。

まちと小・中学校をつなぐ175段の大階段は、単なる移動空間ではない。階段を上り下りする日々の子どもの活動がまちから見えることで、子どもたちの成長をまちのみんなが見守ると同時に、復興していくまちを勇気づける風景となることを願った。

私たちはこれまで、建築を「強い形」としてつくることよりも、人間の活動や関係性が重なり合い、時間をかけて風景化していく状態に関心を持ってきたのだと思う。

風景とは、単に美しい景観ではない。人々の営みが繰り返されることで、時間をかけて立ち上がる環境そのものなのではないか。

建築は、その営みを受け止める器であると同時に、人々の活動を増幅し、連続させる媒介でもある。東日本大震災を経験するなかで、何気ない日常の風景が、人々をどれほど勇気づける存在であるかを私たちは改めて実感した。

そして近年、私たちはさらに別の問いへ向き合い始めている。

それは、そもそも風景そのものが失われつつある現代都市において、建築はどのように人間の身体感覚や活動を都市へ接続できるのか、という問いである。

後編は、渋谷や日本橋、六本木、千駄ヶ谷といった都市プロジェクトを通して、「風景を変奏する建築」について考えてみたい。



①アグリカレッジ福島 ©ToLoLo studio ②土生公民館 ©足袋井 竜也 ③京都外国語大学新4号館 ©阿野太一 ④共愛学園前橋国際大学5号館 ©共愛学園前橋国際大学